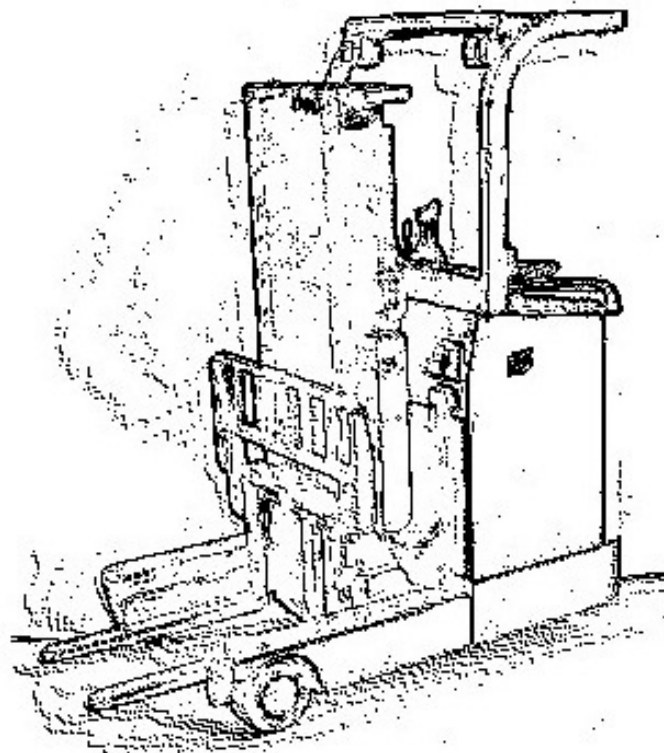


夏場は毎日 1 人が熱中症で倒れた

聞き書き
トヨタ自動車組立工場



sakamoto

夏は室温40度超す現場でライン作業

ラインが止まったので「またか」と思った。すぐに救急車がやって来る。門の側に常に待機しているのだから1分以内だ。夏場は最低でも1日に1人の作業者が倒れた。熱中症で、だ。

愛知県にあるトヨタの自動車組立工場。生産車種はランドクルーザーなど。中田（仮名、51歳）は派遣社員として、平成18年3月からここに約1年半勤めた。派遣会社が用意したアパートの家賃は5万円。敷金等は不要だ。アパート代は全額自己負担。洗濯機、電気釜、エアコン、テレビなど生活に必要なものは備わっていた。

手取り額は月約30万円。残業があった時は約36万円。社会保険はかけなかった。雇用保険のみ。2ヵ月後に赴任手当2万円が支給された。働き始めた当初の時給は1200円。10月に1250円。20年2月に1300円に昇給した。残業は2割5分増し。

会社へは、車で約5分の距離。午前5時45分までに出勤して6時から作業開始。定時は15時15分。1時間残業して16時30分までのケースが多かった。夜勤は16時から午前1時までで、残業はない。

夜勤の場合、午後10時から時給が2割5分増しになるとともに深夜手当が別途325円加算される。昼勤と夜勤は1週間の交代制。土・日曜日は休業日だ。正月、盆などで休みが続いたときはその月、土曜日に1～2回出勤した。

仕事場は、トラックが運んできた部品を台車に積み込み製造ラインに搬送する部署。指示票があり、カンバンに沿って納入する。世界に誇るトヨタのカンバン（ジャストインタイム）方式だ。工程間の仕掛在庫を最少に抑えることを目的とし、カンバン（部品納入時間や数量を書いた作業指示票）を用い必要なモノを必要な時に生産する方式だ。

部品を積んだ6台連結の台車を電気自動車「ユニエレカ」に乗り、運転してラインまで運ぶ。ユニエレカは満充電状態で1日持つ。半日乗って替える。牽引した台車をラインに投入する時は1台ずつ手で引っ張って入れる。部品を積んだ状態で1台あたり100kgは優に超えるため軍手をしていてもタコができるほどだ。

昼休みは毎日30分間だけ

愛知県に本社を置く、自動車部品輸送を主体とするトラック運送事業者が請負っている現場。そこに派遣社員を斡旋している人材派遣会社の募集に応募して採用された。

休憩時間は8時間労働の場合、午前8時と10時、午後3時に各15分ある。昼休みは11時30分から45分間。約2時間に1回の割合で休憩を取ることができる。

だが、中田の場合、昼休みは30分間だけだ。部品を納入する運送事業所の倉庫がトヨタの工場のすぐ側にありトラック3台で切れ目なく部品を納入している。自社内に在庫を持たないカンバン方式は、下請けに負担を強いる。トヨタの要求に応えるタイミングで部品を納入するためには、工場の至近距離に在庫できる場所を確保するしかないのだ。

ラインに部品を供給する業務は中田が一人で担当しているため休んでいるヒマなどない。だから、比較的、長続きしない部署でもある。昼勤と夜勤にユニエレカは各1台ずつ。中田ともう一人、トヨタの社員が担当していた。しかし、同じ仕事を4年続けていた彼はある日、電話で退社を告げて中田より先に辞めてしまった。他の現場より休憩時間が極端に少ないのに同じ給料のため、担当した誰もが不満を口にしていたようだ。

中田が所属するラインに部品を供給する現場の人員構成は、トヨタの社員が約20人（年齢層25～30代。うち主任が10人。管理職は定年前の3人）。期間工約10人、派遣約30人。管理職を除くと、全体で40～50代は中田のほか数人だけだ。

工場に配属される前、運送業者の倉庫内で台車を3台牽引してユニエレカを運転する訓練が行われた。3日間の練習で「大丈夫だといわれた」。トヨタの工場では1日乗ってOKを出された。適正のない派遣は、他の仕事に回される。部品供給がスムーズに行われないとラインが停止するためだ。

狭い通路をぬって部品を組立ラインまで搬送する仕事は思ったより簡単ではない。台車6台を牽引するため内輪差を考えながらの運転はけっこう神経が疲れる。台車が点在する備品や壁に接触する度に厳重に注意される。派遣・期間工の中には1ヵ月もたない者もいた。

工場内の室温が40度を超える夏場は熱中症で倒れる作業者が1日に1人は必ずいた。ラインが止まるのでその都度、「またか」と思う。門を入った守衛室のそばに救急車が待機しているため1分で来る。トヨタ専属の救急車だ。倒れた作業者には気の毒だがつかの間の休憩時間だ。幸い、中田は倒れた経験はない。

製造ラインにスポットクーラーはあるが部品搬入口が頻繁に開放されるため外気が進入してくる。工場内は蒸し風呂状態だ。特に、ライン上で絶え間なく働き続ける工員にとっては過酷な作業環境だ。

家族の絆がキツイ現実に立ち向かうパワー

九州にいても仕事がないので家族を残しての出稼ぎだ。地元では得られない収入だが翌年の課税額の多さに驚いて妻が言った。

「お父さん、帰って来て」。

二重生活の負担もあるし地元で働いても結局、暮らし向きに大差はなかった。中田は、「今年は九州大会に連れて行ける」と思った。一昨年、地元のゲーム大会で優勝した上の子を九州大会に連れて行ったからだ。家族一緒に暮らせることが何よりだった。

派遣会社に辞める旨を伝えたら惜しまれた。働いた約1年半の間、欠勤はない。風邪で熱があっても仕事に行った。生来の器用さと真摯な取り組みで仕事を順調にこなした。「中田さんなら、いつでも歓迎します」と言われたことが少し誇らしかった。

秋葉原通り魔事件の加藤智大容疑者も静岡県にあるトヨタ下請けの自動車組立工場の派遣社員。八王子の通り魔事件の容疑者も正社員契約を前提に働いていた派遣社員だという。

派遣社員という点で中田は彼らと共通項を持つ。それ以外で中田と彼らの違いは何だろうか。年代が違う。中田には家庭がある。妻という女がいてその間に生まれた子供がいる。

かつて中田は正社員として働き、バブルの頃は人並み以上の生活を満喫した。その後、会社が倒産し消費者金融から生活資金を借りるうち多重債務者となった。たぶん絶望していた。あまり話したがらないので、そう推測する。

中田の両親を知っている。借金していた当時、酒の好きな親父さんが酔って、「殺してやりたい」と言い放ったことがある。それに対して中田は「殺してくれ」と返した。殺伐とした雰囲気ではなかった。言葉の裏に「しっかり生きろ」との思いが籠められていた、と私は感じた。

中田の家族は間違いなくつながっていた。辛い日々を過ごしていた中でもあきらめることなく、互いが確かにつながっていた。人はつながることで暮らしていけるのだと思う。過去につながったことがある事実を糧に目の前のキツイ現実に耐えられる。

いま、中田の家族は実家で両親と同居している。借金返済にもメドが付いた。仕事はまだ見つからないが、「下の子どもゲームが上手い。俺に似て足も速い」と笑う。

※文中の賃金等は平成18年当時のものです。

夏場は毎日1人が「熱中症」で倒れた～トヨタ自動車組立工場での派遣体験

<http://p.booklog.jp/book/75375>

著者 : sakamoto

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/karatake07/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/75375>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/75375>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ